



Hikone Castle Town  
彦根城を世界遺産に

## 天守を望む路地

意外と見えない天守の威容

天守は彦根城の象徴である。

しかし、意外と城下町から見えない。小高い山の上に建つにもかかわらず、見えない。

考えれば、細い街路と密集した町屋や武家屋敷、見えなくても当然だ。

しかし、城下町の設計において、何本か基準となる街路が設定された。

電線や電柱が少々じゃまだが、ここからはよく見える。さあ、ここを探してみてください。



Hikone Castle Town  
彦根城を世界遺産に

## 足軽たちの町

井伊家の福利厚生は完璧

足軽は、100石取り以下の最下層に位置する武士である。  
彦根の城下町では、その縁辺部に、いくつかの組に分かれて暮らしていた。  
多くの藩では、長屋に住み、決して恵まれた住環境とは言えない場合も多い。  
しかし、彦根藩井伊家では、門・庭付き、3DK級の一戸建ての足軽屋敷だ。  
その手ごろな住環境の故か、現在も30棟を超える足軽屋敷が残っている。



Hikone Castle Town  
彦根城を世界遺産に

重要文化財

おおほらべんざいてん

大洞弁財天

領民総意のクラウドファンディング

佐和山の西麓には、<sup>せいりょうじ</sup>清涼寺・<sup>りょうたんじ</sup>龍潭寺など、井伊家ゆかりの社寺が並ぶ。

大洞弁財天（長寿院）もその一つ。

元禄8年（1695）に4代藩主、井伊直興の発願によって建立された。

領内の安寧を祈願したもので、建立には、領民から各1文の奉加金を集めた。

寺院には珍しく、本堂に東照宮と同じ「権現造り」を採用したのは、

直興が日光東照宮の改修総奉行を務めたことに関係するようだ。



Hikone Castle Town  
彦根城を世界遺産に

## 彦根仏壇

城下町の伝統産業



彦根の伝統産業の一つとして彦根仏壇がある。

漆塗り、金箔押しの仏壇で、4尺の間仏間に収める豪華さが特徴である。

工部七職と呼ばれる、各工程の専門の職人が、それぞれに工房を構え、

仏壇商がそれぞれに発注する、分業方式での製造も特徴だ。

この仏壇産業、本来は塗師や指物師さしものし、鋳職人かざりなどの武器生産の職人が転職したものとも言われるが、実際のところ、その歴史は謎である。



Hikone Castle Town  
彦根城を世界遺産に

彦根市指定文化財

## 井伊神社

もう一つの権現造り

幕末も近づけば、藩主は祖先を神格化するなど、自らの権威を高めようとする動きが活発になる。彦根井伊家においても、これは同じで、第12代藩主直亮は、天保13年（1842）に井伊神社を創建した。井伊家の始祖 井伊共保とともに、彦根藩初代直政、2代直孝も合祀した。その社殿は豪華な権現造り、東照宮と同じ形式である。



Hikone Castle Town  
彦根城を世界遺産に

名勝

## お浜御殿

井伊家の下屋敷

松原下屋敷とも呼ばれる。井伊家の下屋敷として、プライベート色の強い御殿である。見どころは、庭園。琵琶湖と松原内湖に挟まれた砂洲の上に位置するという特徴を生かし、この庭園の池は、琵琶湖から直接水を引き込む方法が採用された。いわゆる、「汐入り」の庭である。海辺の「汐入り庭園」では、一日おける水位の変化を楽しむが、琵琶湖を利用したお浜御殿では、年間かけての、ゆっくりとした、そして、大きな変化を楽しんだ。



Hikone Castle Town  
彦根城を世界遺産に

## 朝鮮通信使

学問と人格の日韓交流

江戸時代の日本と韓国的外交を担った朝鮮通信使。将軍の代替わりなど、江戸時代に12回来日し、その内10回は、彦根でも宿泊した。通信使は、国と国の正式な外交を担うだけでなく、各地で武士や僧侶などとの学問や教養による交流も活発に行った。彦根でも、岡本半介などとの公私にわたる交流が知られている。その朝鮮通信使の高官の宿泊所の一つが、キャッスルロードに面する宗安寺。また、付近の江国寺には、通信使が書いた扁額<sup>へんがく</sup>も残っている。